認知言語学原理

山梨正明 著

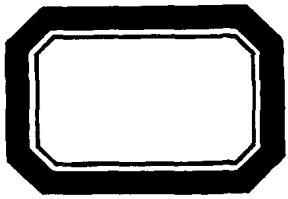
Kurosio

認知言語学原理

江苏工业学院图书馆
藏书章

山梨正明

くろしお出版 2000



山梨正明（やまなし・まさあき）

（略歴）
1948年 静岡県生まれ. カリフォルニア大学 (B.A., 1971)、ミシガン大学 (M.A., 1972)、ミシガン大学 (Ph.D., 1975)　現在、京都大学総合人間学部教授.

（主要著書）
『生成意味論研究』(開拓社, 1977, 市河三喜賞)
『意味論』（共著、大修館書店, 1983)
『発話行為』(大修館書店, 1986)
『比喩と理解』(東京大学出版会, 1988)
『推論と照応』(くろしお出版, 1992)
『認知文法論』(ひつじ書房, 1995)

認知言語学原理

2000年4月25日第1刷発行
2002年4月16日第3刷発行

◎ 著者　山梨正明

版元　くろしお出版
〒112-0002
東京都文京区小石川3-16-5
TEL　(03)5684-3389
FAX　(03)5684-4762
担当　福西敏宏
印刷　シナノ印刷

© Masa-aki Yamanashi 2000

●乱丁・落丁はおとりかえいたします。本書の無断転載・複製を禁じます。

ISBN4-87424-189-1 C3080

まえがき

学問の世界は、イマジネーションを豊かにしていくことによって、無限に広がっていく。言語学も例外ではない。言語学を、せまい意味での言葉の学（あるいは言葉の科学）として理解するならば、言語現象とその背後に存在する言葉のメカニズムを明らかにしていくことが、一応、この分野の目標ということになる。しかし、その研究領域を、はじめからこのように限定していくことには問題がある。言葉の研究も、イマジネーションを豊かにし、視点を柔軟に切りかえていくことにより無限に広がっていく。

言葉は心の機能のあらわれでもある。また、脳の機能のあらわれでもある。このように考えていくと、言葉の研究は、心の科学や脳科学の世界につながっていく。言葉の背後には、脳と心が存在している。しかし、脳や心が、人間から切り離されて、宙に浮いているわけではない。その背後には、言葉を話している生身の人間、われわれが投げ込まれている環境が存在している。その環境は、単なる物理的な環境ではなく、生物的な環境、文化・社会的な生活環境でもある。それはさらに、歴史的な環境であり、生物の延長としてのわれわれが辿ってきた進化の文脈としての環境でもある。

言葉は、このようなひろい意味での環境のなかで進化し、発達してきた伝達の手段の一種である。また、言葉の形式と意味の発現を可能とする人間の認知能力は、環境と言語主体の相互作用を反映するさまざまな身体的な経験に支えられている。現在、新しい言語研究の場をつくりつつある認知言語学のアプローチは、身体性を反映するさまざまな認知能力の側面から、言葉の世界を探究していくアプローチである。これまでの言語学の領域では、言葉の形式と意味の発現を可能とする言語主体の感性や身体性を反映する認知能力の観点から、言葉の世界を探究していく研究は体系的にはなされていない。

本書では、このひろい意味での認知能力の観点から、言葉の世界を問い直していく。このアプローチは、言葉の研究をこえる知の探究の世界に通じていく。先にも触れたように、言葉は、心や脳の機能のあらわれでもある。また、心や脳の機能は、環境とインターアクトしていくわれわれの身体機能と密接にかかわっている。この点

を考慮するならば、心と脳、さらに肉体をもったわれわれ自身が、外界とどのようにインターアクトし、外界をどのように意味づけしているかという、ひろい意味での身体性にかかわる制約を考えながら、言葉の世界をとらえ直していくことが可能になる。人間が、生物の延長としてどのような身体をもち、どのような環境にどのような形で投げこまれて世界をみているか、といった身体論的な視点が重要な意味をもってくる。本書では、この身体論的な視点を反映する認知言語学の観点から、言葉とその背後に存在する人間の知のメカニズムの問題を考えていきたい。

もちろん、認知言語学のアプローチが、言葉と人間の知の問題にどこまで迫っていけるかは、経験的に決められなければならない。学問の世界は、その時代を反映する科学観や人間観によって多分に左右される。言葉の研究も例外ではない。言語学の分野で提唱される理論も、その時代を反映する科学観や人間観（さらに言えば、その時代の科学観や人間観を支配するパラダイム）によって多分に左右される。

1960年代の終り頃、キャンパスが荒れていた頃、「歌ってマルクス・踊ってレーニン」の歌声喫茶(?)があった頃、海の向こうでウッドストックのコンサートがあった頃に耳にしたある大学の宣揚歌に、次のような一節がある。

桐の葉は 木に朽ちんより 秋来なば さきがけ散らん
名のみなる 廃虚をすてて 醒めて立つ ... われら

若い頃に、感動した言語学の理論も、歳とともに色あせてみえる場合がある。今、感銘をうけている理論もいずれは色あせ、やがては廃虚と化していく運命にあるのかも知れない。ある瞬間、これ以外の科学観、人間観などあり得ないと惚れ込んだパラダイムでさえ、次の時代には、新たなパラダイムがそれにとって代わっていくのかも知れない。しかし、新しいパラダイムがつねにより正しい学問観、言語観に通じていくとはかぎらない。また、ある学問の世界において、制度化され、一定の期間にわたって存続している（ように見える）理論ないしはパラダイムが、かならずしも経験的に正しい方向にむかって進展しているとはかぎらない。制度的には存続し、理論の修正・改訂が繰り返されていても、実質的には経験事実から遊離し、閉塞状態に陥っていく学問が多々存在しているという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

事実は、過去の歴史からも学ぶことができる。

実質的な意味でその学問が存続し、新しい展開を遂げていくためには、つねにその学問の背景となっている科学観、人間観を批判的に吟味し、検討していかなければならない。現在、新しい言語研究の場をつくりつつある認知言語学の学問観も、つねにこのような批判的な視点から吟味し、検討していかなければならない。もし、経験的に、その言語学の背景となっている科学観、人間観が健全なものであるならば、ある時代にその研究のうねりが制度的に衰え、また時代によって、その学問の場が背景化されていったとしても、すくなくともその言語学が育んだ健全な考え方と視点は、時代をこえて存続していくにちがいない。また、その言語学の背景となっている科学観、人間観が健全なものであるならば、その学問は、ある時点では背景化されるとしても、時代により蘇ってくるにちがいない。本書の認知言語学の背景となっている科学観、人間観のなかにも、この意味で時代をこえる健全な考え方と視点が育まれているものと信じる。

本書の一部は、金沢大学文学部、愛媛大学教育学部、大阪市立大学文学部、滋賀大学教育学部、静岡大学人文学部、光華女子大学文学部、東京大学文学部、京都大学霊長類研究所の集中講義での考察を背景としている。講義での議論、質疑応答の場に積極的に参加してくれた各大学の学生諸氏に、この場を借りてお礼を申しあげたい。また、京都大学の学生、とくに著者の脱線が多くとりとめもない講義に、暖かく耳を貸し、忍耐をもって接してくれる総合人間学部と文学部の学生、人間環境学研究科と文学研究科の院生に感謝したい。

本書を執筆していく段階では、認知言語学フォーラム、東京・関西の認知言語学研究会の関係者の方々、くろしお出版の福西敏宏氏にいろいろ御世話になった。心よりお礼を申し上げたい。最後に、いつもながら、研究、生活のあらゆる面において、励まし支えてくれる家族に感謝したい。

京都 上賀茂　　1999月12月3日

山梨正明

認知言語学原理

目次

まえがき iii

第1章　認知言語学と言葉の世界 2
1.1　感性・身体性からみた言葉の世界 2
1.2　認知言語学の言語観と科学観 3
1.3　計算主義の言語学の限界 5
1.4　パンクロニック的視点 6
1.5　感性・身体性から知性へ 7
1.6　認知言語学と「認知」の意味 8
1.7　認知能力の発現としての言語 9
1.8　言語主体と認知プロセスの創発性 11
1.9　認知言語学の記述・説明の経験的基盤 12
［注］ 14

第2章　認知言語学の基本的枠組 18
2.1　認知言語学のアプローチ 18
2.2　認知のプロセスと言葉の意味 19
2.2.1　図・地の反転プロセス 19
2.2.2　ベースとプロファイル 20
2.2.3　基本的な認知対象 21
2.3　トラジェクターとランドマーク 23
2.4　外部世界の概念化と言語カテゴリー 26
2.4.1　位置関係と移動の概念化 26
2.4.2　場所・空間のサーチ・ドメイン 28
2.4.3　方向性と認知主体の視線 29
2.5　認知的視点に基づく叙述と修飾 32
2.5.1　特定化と事例化のプロセス 32

2.5.2　事態と参与者の認知的規定 36
2.5.3　認知ドメインと叙述の認知規定 39
2.5.4　複合的な事態の認知規定 43
2.5.5　事態認知と焦点化の機能 46
2.6　認知プロセスと言葉の発現 47
［注］ 48

第3章　言葉と認知のダイナミックス 56
3.1　言葉と認知プロセス 56
3.2　外界認知とスキャニング 56
3.3　スキャニングと認知主体の視座 57
3.3.1　対象の探索空間と視線の移動 60
3.3.2　空間移動と「見え」の変化 62
3.3.3　移動の知覚的痕跡と軌道のイメージ 65
3.3.4　認知主体の移動と主観的知覚 68
3.4　前景・背景、図・地と言語現象 70
3.4.1　図-地の反転と際立ち 70
3.4.2　状況のフレームと前景化 72
3.4.3　セッティングと参与者の反転 74
3.4.4　＜統合性＞と＜離散性＞の反転 76
3.4.5　図-地の認知と関連現象 78
3.5　参照点能力と言語現象 85
3.5.1　参照点とターゲット 86
3.5.2　参照点能力とアクティヴゾーン 87
3.5.3　照応現象と参照点能力 90
3.5.4　参照点能力からみた話題化と関連現象 95
3.6　プロファイル・シフトと文法化 99
3.7　認知のダイナミックスと言語研究 103
［注］ 104

第4章　外界認知と言葉の身体性 118
4.1　言葉の身体性と主観性 118
4.2　外界認知と言葉の意味 119
4.2.1　場所・空間の認知と意味拡張 121
4.2.2　対象の形状と知覚のモード 123

4.3　身体感覚・五感を介しての外界認知 125
4.3.1　体感性と意味の拡張 125
4.3.2　五感と身体部位のイディオム 127
4.3.3　感覚のモダリティと思考・判断 129
4.3.4　視覚モードの優位性 130
4.4　知覚、身体感覚と＜見立て＞の複合モデル 132
4.5　運動感覚と外界認知の主観性 135
4.6　経験のドメインとイメージスキーマ 139
4.6.1　概念構造とイメージスキーマ 140
4.6.2　空間認知と意味の根源 141
4.6.3　イメージスキーマのトポロジー的継承 142
4.6.4　複合的視点からみたイメージスキーマ 143
4.6.5　他のイメージスキーマと意味の主観化 146
4.6.6　イメージスキーマのネットワーク 149
4.6.7　イメージスキーマの価値付与と意味の主観性 153
4.6.8　社会・文化的意味の根源 157
4.7　空間認知による否定概念の拡張 159
4.8　イメージスキーマ変換 164
4.9　日常言語の身体性と創造性 168
［注］ 169

第5章　カテゴリー化の能力と拡張のメカニズム　178
5.1　言語現象の予測性と慣用性 178
5.2　スキーマ、プロトタイプと拡張事例 180
5.3　日常言語のカテゴリー化と拡張現象 181
5.3.1　音韻レベルの複合ネットワーク 181
5.3.2　形態レベルの複合ネットワーク 184
5.4　複合ネットワークのダイナミックス 187
5.5　語彙レベルの複合ネットワーク 188
5.6　拡張関係と＜記号・意味＞のミスマッチ 192
5.7　多義性のネットワークと家族的類似性 195
5.8　カテゴリー化と言葉の創造的拡張 199
5.9　拡張事例と動的ネットワーク 205
5.10　分析性の変化と言葉の創造的拡張 208
5.11　パターンの発現と言葉の創造性 217

5.12 事態認知のダイナミズムと構文の拡張 218
5.12.1 構文の複合ネットワークと事態認知 218
5.12.2 動詞カテゴリーの複合ネットワーク 227
5.13 認知能力と言語使用からみた言葉のエコロジー 238
[注] 239

第6章 一般的展望 250
6.1 認知言語学のパラダイム 250
6.2 開かれた系としての言語体系 251
6.3 古典的カテゴリーの限界と動的ネットワーク 252
6.4 生成意味論のレガシーと認知言語学 253
6.5 記号・計算主義と自律的言語学の限界 254
6.6 言語習得の研究に関する新たな展望 257
6.7 言語モジュールと普遍文法仮説の本質的問題 259
6.8 言語能力の根源と言葉の生物的・進化的背景 262
6.9 認知言語学のアプローチと新しい認知科学 265
6.10 言語研究の身体論的パースペクティヴ 267
[注] 268

参考文献 277
索引 301

認知言語学原理

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第1章
認知言語学と言葉の世界

1.1 感性・身体性からみた言葉の世界

言葉の世界の魅力の一つは、言葉それ自体の面白さ、奥ゆかしさを教えてくれるだけでなく、言葉をとりまく環境、歴史、文化的・社会的な文脈をはじめとする様々な要因を背景にして、知・情・意にかかわるひろい意味での人間の知のメカニズムの探究のための手がかりを与えてくれる点にある。言葉は、われわれが具体的な環境のなかに身をおき、環境との相互作用による身体的な経験を動機づけとして獲得してきた伝達の手段である。言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる要因（五感、運動感覚、視点の投影、イメージ形成 等）がさまざまな形で反映されている。生物の延長としての人間が長い進化の過程をへて獲得するにいたった言葉の世界は、根源的に感性、身体性にかかわる要因によって動機づけられている。

一般に、これまでの言語学の研究では、形態、構造、真理条件的な意味を中心とする言葉の知性的な側面を反映する研究が中心となっており、言葉の感性的、身体的な側面にかかわる能力、さらにこの種の能力をふくむより包括的な認知能力の観点から、言葉の世界を問い直していくという視点は考慮されていない。これまでの言語学の研究では、文法をはじめとする言葉の知的（ないしは知性的）な側面にかかわる言語現象の研究が中心になっており、言語主体としての人間の創造性、情緒・感情、五感、運動感覚をはじめとする言葉の感性的な側面とは独立した、知性的な側面を反映する記号系としての言葉の研究に力点がおかれている。

しかし、生きた文脈のなかで観察される言語現象のなかには、言

葉の知性的な側面だけでなく、感性、身体性にかかわる言葉の側面を考慮しなければ実質的な説明が不可能な現象が広範に存在する。言葉の形式と意味はどのように発現し、実際の伝達の場においてどのように機能しているのか。言葉としての記号系は、どのようなカテゴリー化の過程をへて概念体系を発展させてきたのか。言語能力の根源は、どこに求められるのか。言葉の形式と意味の関係は、どのように拡張されゆらいでいるのか。言葉の獲得過程は、どのような経験的な基盤に動機づけられているのか。言葉の創造性の根源は、どこに求められるのか。本書では、これらの問題を、認知言語学の研究プログラムを背景とする新しい言語科学の観点から考察していく。

1.2 認知言語学の言語観と科学観

言語研究のアプローチを理解するには、それぞれのアプローチにかかわる理論や方法論を理解するだけでなく、それぞれのアプローチにかかわっている研究者が、どのような言語観をもっているのか、どのような人間観、世界観から言葉をみているのか、言葉と言葉の背後に存在する主体との関係をどのように位置づけるのか、外部世界と言語主体との関係をどのように理解するのか、といった(言語研究にかかわる理論や方法論以前の)本質的な問題を考えていかなければならない。また、この種の本質的な問題を理解しないかぎり、言語研究のそれぞれのアプローチの背景となっている理論や方法論を理解するのは厳密には不可能であると言える。これは、ある意味ではどの研究者も念頭においているはずの常識的な問題意識と言える。しかし、実際に具体的な研究に向かっていく過程で、この種の問題意識は背景化され、問題の研究を支配しているアプローチの本質とその研究の方法論を支配しているパラダイムを検討していく場が見失われていくのが現状と言える。

認知言語学の研究プログラムを理解するためには、その背後の科学観と方法論を特徴づけている認知言語学のパラダイムを、西洋を中心とする伝統的な科学観との関連で理解する必要がある。西洋の科学的な思考の伝統を特徴づけている視点の一つは、客観主義的な世界観であるといえる。この世界観のもとでは、認知主体としてのわれわれの"理性的"な側面は、感性や想像力、主観的な視点、環境との相互作用をはじめとするひろい意味での主体の"身体性"に

かかわる側面とは切り離され、前者のいわゆる理性的な側面から、人間の思考、推論、言語をはじめとする認知主体の知のメカニズムの探究がなされてきたといえる。[1]

この客観主義的な世界観では、思考、推論、言語をはじめとする知的な営みは、"身体性"にかかわる要因とは独立した抽象的な記号の操作によって特徴づけられ、記号に対応する意味は、認知主体とは独立に存在すると考えられる客観的な世界、すなわち、主体としてのわれわれの解釈から独立して存在する世界との対応によってとらえられるという前提に立っている。この客観主義的な見方によれば、記号は、身体性にかかわる主体の認知的要因や経験的な基盤からは独立した外界との対応関係を通してその意味が与えられ、外界と対応する記号が外界の内的表象の反映として規定されることになる。

認知言語学のパラダイムは、このような客観主義的な世界観にもとづく言語学のアプローチを問題とする。認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、ミクロ・レベルからマクロ・レベルにいたるどのような要素であれ、認知主体が外部世界とインターアクトし、外部世界を解釈していくダイナミックな認知プロセスの反映として規定される。外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点との関連でさまざまな意味づけがなされる。また、このアプローチでは、言葉の世界には、人間の知性的な側面だけでなく、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験が反映されているという立場をとる。[2]

このように言葉の知性的な側面だけでなく、感性や身体性にかかわる側面を重要視するアプローチは、主観的な科学観にもとづく言語学のアプローチであるという解釈がなされるかも知れないが、それは適切な解釈とは言えない。認知言語学は、言語現象だけでなく言葉とその背後に存在する認知主体との関係を考慮に入れていく点では、主体性(ないしは主観性)を重視する言語学のアプローチであると言える。しかし、このことは決して主観主義に陥った言語学のアプローチを意味するわけではない。[3] このアプローチは、あくまでも上に述べた意味でのいわゆる客観主義的な言語観(すなわち言葉は、感性や身体性にかかわる主体の認知的要因や主体の経験的な基盤から独立した記号系として分析可能であるとする言語観)を問

題にするのであり、言語現象への科学的なアプローチを否定するものではない。認知言語学のアプローチは、外部世界にたいする主体的な解釈のモード、外部世界の主観的なカテゴリー化と意味づけのプロセス、認知主体の感性、身体性を反映する言葉の諸相を、客観的で科学的な分析の対象として研究していくという前提にたっている。換言するなら、認知言語学のアプローチは、主観性にかかわる言葉の世界と知のメカニズムを科学的に分析し、その諸相を厳密に体系的に研究していくという前提にたっている。

1.3 計算主義の言語学の限界

前節で触れたいわゆる“客観主義的”な世界観は、計算主義のアプローチを前提とする言語学と初期の認知科学の関連分野の研究の前提になっている。これまでの言語学と認知科学の関連分野の研究は、計算主義のパラダイムを前提とする記号系の構造的な知識の定式化が中心になっている。このアプローチは、言語情報や記憶、認識にかかわる情報は、分節構造をもつ記号系によって表示されることを前提としている。また、この線にそった研究は、言葉や心にかかわる情報処理のプロセスは、この記号表示にたいする一連の操作(ないしは計算)の過程であり、言葉と心にかかわる情報処理のプロセスは、基本的にこの記号操作(ないしは計算)の過程としてとらえられることを前提としている。この計算主義のパラダイムを前提とする言語学のアプローチには本質的な限界がある。

計算主義にもとづく言語学のアプローチは、次のような記号観ないしは言語観を前提としている:(i)日常言語に代表される記号系は、外部世界と相互作用していく認知主体とは独立に存在し、その形式と構造の体系は命題分節的な記号系によって規定可能である、(ii)この記号系に対応する意味は、言語外の文脈から独立して、形式に対応する指示対象(ないしは概念)として存在する、(iii)この記号系を特徴づける構成要素としての文法カテゴリーと意味カテゴリーは、認知主体の解釈からは影響をうけずに独立に存在する。したがって、(iv)この種のカテゴリーからなる記号系の構造と意味は、自律的な記号表示によって規定することが可能である。[4]

この種の前提にもとづく記号観、言語観にたいしては、根本的な問い直しが必要となる。カテゴリー化され安定しているようにみえる日常言語の構成要素(語彙、構文、概念 等)は、一見したところ

人間の主体的、身体的な文脈から独立し、自律的な言葉の構造を保証しているようにみえる。しかし、実際の言語現象には、主体の創造的な視点の投影、視点の転換、主観的なイメージの形成と変容、カテゴリーの拡張、焦点化のずれ 等によりゆらぎが生じ、自律的に安定した記号系としてとらえていくことは厳密には不可能である。この事実を考慮するならば、日常言語の世界を、形式と意味の対応関係にもとづく表示レベルと、このレベルに適用する規則による操作(ないしは計算)として規定していく従来の言語学と情報科学のパラダイムには、本質的な限界があると言わねばならない。

1.4 パンクロニック的視点

日常言語は、さまざまなカテゴリー化のプロセスをへて、形式と意味の体系からなる記号系をつくり上げている。このようにしてつくり上げられた記号系は、一見したところ安定しているようにみえる。しかし、カテゴリー化された記号系のある側面は、言語内・言語外のさまざまな要因によって変化し、この変化のプロセスをへながら新しい形式と意味の関係をつくり出している。カテゴリーの分化、カテゴリーの変容にかかわる現象は、感性や身体性をはじめとする多様な要因に起因している。この種の現象を引き起こす主な要因のなかには、類似性やアナロジーの認知作用にもとづく概念領域の拡張、具象的な概念領域から抽象的な概念領域への拡張がふくまれる。

日常言語の発生の根源には、感覚的な情報処理、イメージ形成、視点の投影、共感、視点のゆらぎをはじめとするさまざまな感性的な経験、身体的な経験が存在する。したがって、この種の経験を背景とする生きた文脈の中から、カテゴリーの分化と分節化をともなう日常言語の記号系の発現の動的なプロセスをみていく必要がある。一見、領域固有的に分化し、モジュール的に落ち着いているようにみえる言葉の世界は、記号が発現し変化し続けるゆらぎのなかの結果的に安定したかにみえる現象の一面にすぎない。

日常言語は、具体的な状況の中で機能する伝達の手段であり、さまざまな要因が複雑にからみ合っている。したがって、日常言語を記述していく際には、一般に、時間的・歴史的な変化の側面にかかわる通時的な考察と、この側面を捨象した共時的な考察は区別していくアプローチがとられる。しかし、この種の区分はあくまで方法

論的な区分であり、この二つのレベルにかかわる事実が先験的に関係していないという保証はどこにもない。日常言語は、歴史的な過程をへて変化を遂げてきている記号系の一種である。したがって、共時的な視点からみた言語現象の一面が、通時的・歴史的な変化にかかわる要因によって動機づけられている可能性も十分に考えられる。換言すれば、通時的・歴史的な変化のプロセスないしは拡張のプロセスにかかわる要因が、共時的な視点からみた言語現象の拡張のプロセスに反映されている可能性を考慮していく必要がある。このことは、言葉の科学に、「通時的」(ダイアクロニック)な視点と「共時的」(シンクロニック)な視点を統合する「汎時的」(パンクロニック)な視点を導入する研究が必要となることを意味する。

1.5 感性・身体性から知性へ

これまでの言語研究は、知・情・意がかかわる言語現象のうち、主に知の側面を中心とする言葉の研究－そのなかでもいわゆる文法(ないしはシンタクス)を中心とする研究－に力点がおかれてきたといえる。その意味で、この線にそった言語研究は、<文法・ショーヴィニズム>(あるいは<シンタクス・ショーヴィニズム>)を暗黙の前提とする、いわば「知性的」言語学の営みを続けてきたといえる。これにたいし、認知言語学のアプローチは、この知性的な言語の側面と考えられている現象の背後にある感覚的な経験、外部世界との相互作用に根ざす身体的な経験との関連で、いわゆる言語的(ないしは文法的)知識の発現と分節化のプロセスを見直していくという立場を重視する。[5] この点で、後者の言語研究のアプローチは、「感性的・身体的」な言葉の側面にも注目する言語学のアプローチをとっているといえる。このような言い方をすると、文法研究を中心とする言葉への形式的アプローチをとる言語学の立場から、言葉の知性的な側面の問題を軽視する言語学のアプローチであると速断されるかもしれない。しかし、言葉の「感性的・身体的」な側面も重視することが、即、言葉にかかわる「知性的」な側面を軽視することにつながるわけではない。これまで知性的とみなされてきた言語の側面も、感性的・身体的な方向から根源的に問い直していく必要がある。[6] 認知言語学のアプローチは、この感性的な視点から知・情・意にかかわる言語現象をダイナミックに見直していくことにより、これまで形式と意味の体系からなる記号系として

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com